



「今でも餃子の仕込みは私の仕事です」

やま いさお
八木 功
二ハオ会長
昭和9年中国・旅順に生まれる。敗戦後父親と生き別れになり、中国に残留。昭和54年に日本に永住帰国。昭和58年「羽根つき餃子」で知られる「你好」を蒲田に開店した。その人生は石井克則著『二ハオ』羽根つき餃子とともに二つの祖国に生きて（二書房）で紹介されている。

「你好」を蒲田に開店した。その人生は石井克則著『二ハオ』羽根つき餃子とともに二つの祖国に生きて（二書房）で紹介されている。今年で33年になります。



「你好」蒲田本店

おいしい、おいしい、食べてください

……で、私がなぜ店を開くようになったのかという話なのですが、学校の先生方が私たち家族を心配してよく遊びに来てくださっていたんです。その時、私がご馳走するのは中国で覚え

儲けようとする店は繁盛しない

いただいた恩は忘れない

そのうちに先生が「八木さん、小さい料理店でもいいから出しながら調理師の免許を取ること、勧めてください。恵比寿にある中華料理学校で調理師の資格を取り、もう自信があります。やります」と報告すると、先生方は「八木さんはお金がないから、みんなでカンパしましよ」と言っていて、ありがたいことに370万円のカンパを寄せてくださり、それを運転資金として蒲田に你好をオープンしたんです。

餃子6個300円

▼お客様の視点に立った経営を心掛けていらっしゃる。

■八木 でも、新しい店をつくっても閉めてしまったことがありません。なぜ閉めたのか。支

抜きません。肉は挽き肉ではなくブロックを買って自分たちで2時間くらいかけて挽きます。野菜も機械ではなく自分たちの手で刻みます。いろいろなやり方を試してきて、美味しい餃子をつくるにはこれが一番だと納得できました。▼八木さんは戦前の中国に生まれ、戦争や文化大革命など激動の時代を生き抜いてこられています。■八木 はい。それこそ人には言えない苦労もたくさんしてきました。（中略）日中戦争が終わり、死んだと思っていた父が日本にいたんです。そして父から手紙が届き、私たち家族は日本へ行くことにしました。そして永住することになったのですが、日本語はすっかり忘れていたので、江戸川区のアパートに住んで生活保護を受けながら生活し、葛西小学校の日本語学級に通いました。少しずつ会話ができるようになったら、小松川第二中学校の夜間学校に通って勉強しました。

編集後記

◆昨年12月末号・週刊新潮の新聞広告に「平均寿命で堂々のV9! 病に倒れる生き方の見本!」とある。『青森県はなぜ早死にするのか』に次の見出しがある。★「早朝から行列! 超濃厚スープが青森流! 朝ラーメン屋」★「野菜は食べ過ぎる」★「けだ中身は漬物! 消費量全国1位! スーパーの「カップ麺」売り場は野菜売り場の4倍の広さ! 塩じゃけに醤油、漬物に醤油、すじこにも醤油!」★「漁師」も365日カップ麺★弘前周辺は「がん死亡率」全国1位★豪雪だから「外出しない」★「運動しない」★「病院に行かない」★「つい笑ってしまい恐縮だが、とても明快だ。要はこの反対を心がければ良い。しかし、平均寿命短命・9年連続全国1位とは恐れ入る」因みに長寿全国第1位は男性が滋賀県、女性が長野県である。

色々な方々に感謝

▼「儲けてはいけない」という言葉には、恩を忘れてはいけないという意味も込められている。■八木 そのとおりです。33年間を振り返ると色々なことがありました。開店した当時、日本語が上手く喋れないためにお客様から思わぬ苦情が寄せられることがありました。店舗の賃貸問題で私を追い出そうとした人もいました。妻から「もう店をやめて中国に帰ろう」と言われたこともありました。しかし、そのたびに色々な方々に助けていただきながら、餃子という小さな食べ物で自分の道を歩いてくることができました。

▼八木さんの人生は、苦しいことや悲しいことをチャンスに変えていく活機应变の言葉そのものの人生でした。■八木 私にはなかなか難しい言葉ですが（笑）、お世話になった人たちが亡くなった両親への感謝の気持ちが生きていて、私を待っていることは確かですね。私が激動の時代を生きて延びて来られたのも、そういう思いがあったからかもしれません。